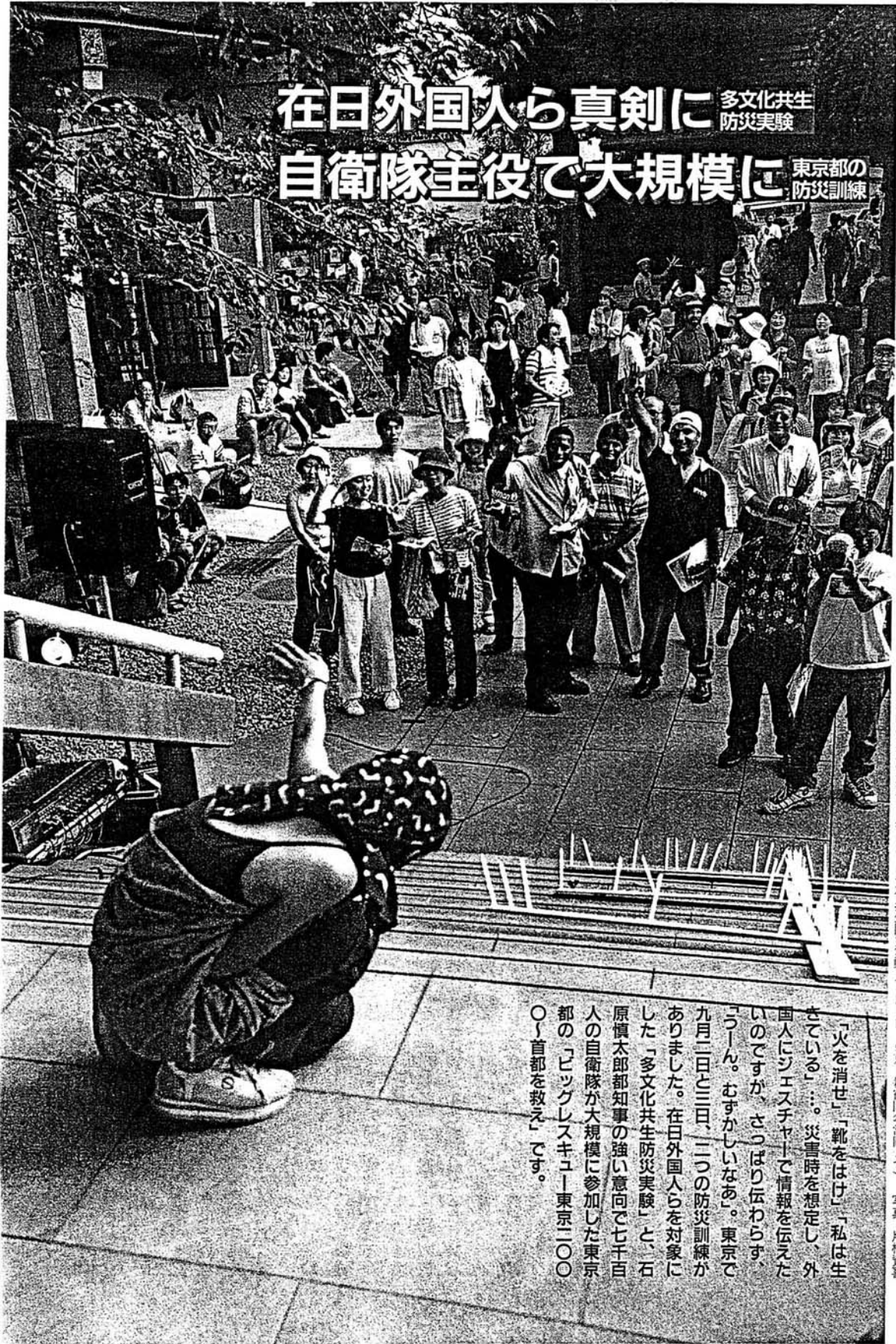


# 在日外国人ら真剣に 多文化共生 防災実験 自衛隊主役で大規模に 東京都の 防災訓練

# 首都東京で二つの防災訓練

簡単なことばも通じがたい外国人には、なかなか通じない、ジェスチャーゲームで災害時の東京の深刻さを考えた、多文化共生防災実験（9月2日、東京・新宿区の常盤公園） 写真・片桐賢喜

「火を消せ」「靴をはけ」「私は生きている」…。災害時を想定し、外国人にジェスチャーで情報を伝えたのですが、さっぱり伝わらず、「うん。むずかしいなあ。東京で九月二日と三日、二つの防災訓練がありました。在日外国人らを対象にした「多文化共生防災実験」と、石原慎太郎都知事の強い意向で七千八百人の自衛隊が大規模に参加した東京都の「ビッグレスキュー東京二〇〇〇」首都を救え」です。



## 多文化の町、新宿を「共生」モデルに

— 第1回多文化探検隊開催 —



2日、新宿・青園寺での「多文化共生防災実験」のフィナーレ。寄せられたメッセージを眺みながら「生」の文字にろうそくをともし、喜納昌西の「花」を取った。このイベントが「多文化探検隊」の最後を飾った

**国際色豊かな東京・新宿を知り、  
多文化、多民族が一緒に生きる方法を考えよう**  
こんなテーマのイベントが3週間にわたって行なわれ、  
多文化共生防災実験など、70余りの企画が催された

東京で37.8度という今夏一番の暑さを記録した2日(土)、新宿区・常盤寺で、「多文化共生防災実験」が行なわれた。さまざまな国籍・言語を持つ人が生活する新宿で災害が起きた時、どのように対応したらよいか、阪神大震災の教訓を踏まえて検討する試みで、境内では7ヶ国語による災害時の多言語放送、応急処置方法や消化器訓練、タンカ搬送、炊き出しなどが行なわれ、外国人を含む大勢の参加者が訓練を体験した。災害時の外国人の権利をどう確立していくかなどをテーマにしたシンポジウムも行なわれた。

これは、先月15日から3週間近くにわたって開催されていたイベント「多文化探検隊」の総まとめとなる最後の催しだ。「多文化探検隊」とは、多文化・多民族の町、新宿をよりよく知ってもらい、「共生」(共に生きること)



英語の通訳ボランティア付きタンカ搬送訓練

について考える主旨のイベントで、「あやしい深夜ツアー」や「ホームレスの人と話をしよう、炊き出し・夜回り体験」「外国籍住民のお宅訪問」「多文化緑日」など、70以上の企画が連日実施された。

イベントの直接のきっかけは石原都知事の「三國人」発言だった。在日コリアンで人材育成コンサルタントの辛淑主さんは、都知事の発言で外国人に対する恐怖心や差別意識があらわれることに危機感を覚えた。集会やデモのような抗議行動とは別の形でリアクションが必要と考え、このイベントを立案し、協力を呼びかけた。

知らないことが差別を生む。外国人や障害者など、マイノリティーと呼ばれる人々と直接触れ合い、よりよく知り合う場を提供しよう——そんな呼びかけに共感した人々が集まり、新宿の商店街や労働組合、市民団体の協力を得て実現した。準備期間はわずか1ヵ月。企業広告はなく、すべてボランティアと寄付金で成り立っている。

在日外国人の問題に詳しい人をゲストスピーカーに、外国人の労働問題や地方参政権、在留特別許可などについて話し合う勉強会風のものから、夜の新宿を練り歩く「あやしい深夜ツアー」、赤線跡や歌声喫茶を回る「ロカビリーと安保ツアー」、安くておいし

い店を回るグルメツアーまで、企画は多種多様。一見まとまりのないこれらの企画について辛さんは、

「意識して硬いもの、軟らかいものとしたわけではないんです。勉強っていうのはきちんとやらなきゃいけないものもあれば、楽しんでやらなきゃいけないこともある。人にも怪しいところや恐いところがあって、それが面白い。だから、いろんな人たちについて知るプログラムを作ったら、結果的にこんなふうになったわけです」

と話す。華やかさを連想させる「イベント」より、むしろ「集い」といった少人数参加の企画が多い。飲食しながらなごやかな雰囲気の中で楽しく話し合う形式だ。ゲストスピーカーツアーのホストも、日本で普通に暮らす町の人々で、彼らの生活レベルで起こる問題を取り上げた。

それでも人気企画には応募が殺到し、30人近い人が集まるものもあり、目標動員数の2,000人は簡単に突破した。

## ■知らない日本を知るツアー

東京を離れ、近郊で多民族が共生する地域を訪れるツアーもあった。その一つで、古くから在日コリアンが暮らす河川敷の町を見学する「川崎戸手ツアー」に同行した。京都から訪れた夫婦、在日30年の米国人女性、学校職員、ドキュメンタリー映画監督など、学生や社会人25人が参加した人気ツアーだ。

前日も「電車で行くラテンアメリカ」ツアーで日系ブラジル人が多く住む、群馬県の大泉町を訪れた高校教師の角田さん(37)は、参加の理由について、「普段触れることのない人々の暮らしを知ることができます。日本の経済を支える労働者の生活を見て、何でこの生徒がこの学校に来たのかっていうものなんとなく分かりますよね」

と話した。角田さんが教える大田区の夜間高校には10名の外国人が通っており、ツアーに参加することで彼らの育った環境や生い立ちを少し理解できると言う。

参加者は、ツアーのホストを務めた戸手教会の牧師、孫裕久さんの案内で地域を歩き、教会でビビンバを食べた後、地域の歴史や住人が抱える問題などについて話を聞いた。

神奈川県川崎市幸区戸手四丁目、多摩川の河川敷で、戦後もまもなく在日韓国・朝鮮人などが住み着き、現在は日本人の単身労働者などを含め100軒の住居に240人が生活している。91年から建設省が進めるスーパー堤防(現在ある堤防を強化するもの)の建設に

より、住人たちは現在立ち退きを迫られている。もともと国有、市有の土地に住む住人たちは、権利や補償など複雑な問題を抱えている。孫さんらは教会内に地域活動センターを置き、住民に働きかけ新しい町づくりと地域の活性化に取り組んでいると話した。

熱心に耳を傾けていた参加者の中にはメモを取る姿も見られ、質問が後をたななかった。参加者は、「川崎市に住んでいたことのあるのに何も知らなかった」「初めて河川敷の住宅地に足を踏み入れ、カルチャーショックを受けた」「本で読んで知っていたが、実際に訪れてみるのは全然違った」などそれぞれ感想を残した。

それらの企画にも参加した、都市計画関係の仕事をする田村岳男さんは、「同じ方向性を持つ人たちとのネットワークみたいなもの面白い」とイベントの違う魅力を語った。解散後、参加者数名は場所を移し、ビールを飲みながらの談話が続き、戸手ツアー参加者だけのメーリングリストの作成も決まった。

短い期間で準備し、「見切り発車」でスタートしたイベントなだけに、行き届かなかった面もある。例えば防災



多摩川沿いでこれから向かう戸手河川敷とスーパー堤防について説明を受ける戸手ツアーの一団。左が案内人の孫さん

実験では、日本語の分からない外国人のために多言語の通訳ボランティアが控えていたが、実際訪れた外国人は在日経験の長い人が多く、日本語をまったく話せない人は少なかった。これはイベント全体を通して言えることで、日本語を話さない外国人への事前の連絡がなかなか行き渡らなかったことが一つの原因だと、事務局員は言う。

しかし、「無理してでもできるだけいろいろやってみよう」という実験的な第1回としては、手ごたえは十分あった。辛さんは言う。

「医療だったら北欧、NPO だったらサンフランシスコ。だったらアジアの多文化共生は日本だ、っていうようなモデルをつくりたいんですよ。5、6年後に世界中の人々が「多文化共生の町を見にいこうよ」って来てくれる、そういうものを作っていかなければいけないと思う」

実行委員会ではすでに第2回の話が出ている。(中野)

47番 市民

# オルタナティブな 市民防災

石原「防災訓練」に対抗して、オルタナティブな「市民防災」の試みがあった。一日の「防災の日」と三日の「ビッグレスキュー東京2000」首都を救えに決めた二日、都庁まで目と鼻の先の常盤寺で、二週間余にわたった一連の「多文化探検隊」企画の締めくくりとして「多文化共生防災実験」と銘打った催し物が開かれた。社民党員らも参加して、災害時にどうすれば多文化の人々が生き残り、共生できるのかを「実験」した。(写真と文 豊田直巳)

この春のいわゆる「三國 判」ともならず、とすれ 肌の色、異なる言語、異い」と。 人籍」に象徴される石原 は地域の人々が共生できる なる文を待った人々が集 淡路大震災でそのまじな事 慎太郎東京都知事の百外 のか、またも地震のまの まさに多民族の街 件が発生の報告は皆無であ 困人や近隣のアジア諸国に 災害が発生したら、どのよ である。ところがその新指 連の発言と、その具体化と 験、するオルタナティブな 多民族共生による豊かさを 伝」によって、関東大震災 も言える、七千百人もの自 試さてもあった。 理解しないのか、民族排外 主義を映る言動を繰り返 人が日本人の手にかかて 排他的な石原発言 今年度の「防災訓練」。 これに対してはさまざま から人々が集まるのではな 困人による大騒ぎが新宿と きたが、今回の催しは、批 く、さまざまな困りから異な か池袋で起きるかもしれない。

## 石原軍事防災ではダメ！ 多文化の共生めざし実験



↑「多文化探検隊」全体の共通テーマである命を象徴し、また災害に地域に皆が助け合っ「生き残ろう」と「実験」の最後に「生」の文字のロウソクに火を入れた。(2日、新宿区常盤寺)

それだけでなく日本に暮らす異なる文化を持った外国人には、先の都知事の発言に象徴される排外的な思想そのものが恐怖なのだ。またその裏返しで日本人にも外国人に対する恐怖心を植え付ける。外国人との出会い、こころした政治状況下で、地元の歌舞伎町商店街復興組合や新宿区職員労働組合ばかりでなく、新宿区に行政をも巻き込んで「いろいろな人たちの出会い」を「探検」する締めくくりに「防災実験」だった。生まれも育ちも新宿という地元を主軸は「昔と違っていろいろな困りからの人たちが通りを歩くようになった」、怖いわけじゃないので、すけ何となく歩きついで、感じを持つようになった。

たんですが、これに参加させてもらって、そんな感じがなくなりましたね」と、娘さんと「非慣食」の炊き出し米をほお張っていた。また「茨城から組合の分、会、みんな来まして」と日本語で話すインド人労働者に「これは飲料水以外に水を使わなくて済むから」と言いつつ、特殊な「こんな多文化の街・東京にも、大地震など、いつ大きな災害が降りかかるかわかりません。そんな時、この街に住むみんなが助け合わなければ、助かるはずの命が失われてしまつた」との実行委員会の呼びかけの通り、「三宅島災害出動から自衛隊を引き戻してまで強行された」「首都を救え」との東京部の防災訓練では、人の命は助けられないのではない。



↑何も英語やフランス語ばかりが外国語ではないというのにはここでは当然と、阪神・淡路大震災の教訓から学ぼうというパネル展示も中国語や韓国語からペルシヤ語やタイ語の翻訳も付いている。